

# 学位論文審査の要旨

学位申請者	胡 穎芝 比較社会文化学専攻2017年度生		論文題目	漱石の「向う側」から晩年の「則天去私」へ —東洋思想との関わりを中心に—
審査委員	主 査:	和田 英信 教授	インターネット 公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副 査:	谷口 幸代 准教授		「否」の場合の理由
	副 査:	宮尾 正樹 教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	伊藤 さとみ 教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	橋本 陽介 助教		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (人文科学)			<input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Comparative Literature)			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について

## 学位論文審査・内容の要旨

本論文は、夏目漱石の文学営為に与えた東洋思想の影響について、四つの側面から考察を行うものである。考察にあたってはとくに「向う側」という視点に着目する。「向う側」とは、現実世界での欠落を慰謝し、補償する場として現実世界とは別に設けられた異世界・空間で、日本の近代小説のなかにしばしば見いだされるモチーフの一つである。論文は序論・結論と、本論の四つの章から成る。

第一章「〈空想的な向う側〉と〈実体を備えない〉神仙世界」では、「向う側」と類似した要素が漱石文学、とくに「草枕」や「虞美人草」あるいは漢詩作品の中に見いだされること、またそれが中国の伝統的な仙境等のイメージを借用したものであることを確認したうえで、実際には「向う側」としての要素の幾つかを充たしていないことを指摘する。そしてそこに描かれる「向う側」の「向う側」としての不完全さは、脱俗願望のシンボルとは成り得ても、現実の軋轢・苦悩からの救済を求めることはできないという「向う側」の特質が反映されているとする。

第二章「風流たる〈向う側〉」では、漱石の「風流」に着目する。隠遁趣味や超俗の思いを満足させることは、現実に身を置きながらも現実とは異なる別乾坤を味わう「向う側」であり、それを漢詩作りや南画を通じて実現することこそが「風流」であるという。

第三章「異色の〈向う側〉」では、「夢十夜」を中心に、夢の非現実的要素の中に「向う側」としての要素を考察する。漱石にとって夢は、その空想を存分に形作ることの可能な異世界であり、その発想の元には、『莊子』を初めとする中国の夢の話の影響が認められること、また夢は、昼の世界の苦悩を補償し、その精神を自由に遊ばせてくれる「向う側」であったとする。

第四章「東洋哲学的な〈向う側〉」は、漱石の晩年の人生観を示すものとされる「則天去私」を論じる。この語については従来より中国の老荘思想、あるいは禅、さらには西洋思想との関わりについて多くの指摘がなされてきた。本論文では東洋思想との関わりを丁寧にたどることに加え、漱石自身の老子や西洋の自然主義に関するエッセイ等を再検討し、あらためて老荘思想の大きな影響を確認すると同時に、当時の哲学研究の流れをみることにより、漱石における老荘思想の受容はいわゆる漢学の素養に止まるものではなく、西洋哲学に対する東洋哲学としての新たな思潮の中に置くべきものであると主張する。また「則天去私」は漱石が最後に到達し得た境地ではなく、いまだたどり着き得ていない理想の「向う側」であったとする。

審査委員会は12月16日、1月30日（書面）、2月22日に開かれた。審査の際には、中国の文献や漱石作品における用例を丁寧に追っている点や、幅広い先行研究に目を通して点の評価されたが、「向う側」という問題設定が有効に機能しているか、参照した先行研究がやや古いものに偏っていないか、論旨の運びに強引な点が見られる、先行研究と自説との関わりが分かりにくい、結論の新鮮さにやや欠ける、といった問題点の指摘がなされた。

申請者はそれらに対応して修正を加えた。また、2月22日の公开发表において、論文の内容をわかりやすく説明し、聴衆の質問に適切に回答した。引き続き行われた最終試験において、学位にふさわしい学力を有することが確かめられた。以上に基づいて、本論文が博士（人文科学）、Ph. D. in Comparative Literatureにふさわしいものと委員会として判断する。